カテゴリーを形成する２種のベクトル
－「真（ま）+色彩語彙」表現の分析－

山田　仁子

Two Kinds of Vectors to Form a Category
— An Analysis of Japanese Expression *"ma*-color term" —

Hitoko YAMADA

Abstract

Japanese *"ma"* is a prefix to express that the topic is a true member of the category classified by the following word. This means that the prefix *"ma"* represents the speaker's intention to categorize the thing in sight, and it functions as a vector to form a category in cognition.

This paper examines the compounds of *"ma"* and color terms to clarify the system of categorization. Though the prefix *"ma"* always indicates that the colors in sight are true members of categories, the compounds *"ma*-color term" do not always refer to the same colors. They sometimes refer to the prototypical colors, and sometimes refer to some colors out of the ordinary color categories of that color term.

Different meanings of the compounds *"ma*-color term" show that two kinds of vectors are in effect in forming categories. A vector to get close to the prototype of the category due to similarity and another vector to get away from some other category due to contrastive difference.

序

日本語の「真（ま）」という接頭辞は、「名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞などの上に付いて、完全である、真実である、すぐれているなどの意を加える。」（『精選版日本国語大辞典第三巻』p. 686）とされる。この「真（ま）」の定義をカテゴリーに照らして解釈すると、その機能は次のように言い換える事ができる。

> 接頭辞「真（ま）」を使用する話者は、自分の目にした物が、接頭辞「真（ま）」の後に続く語彙の示すカテゴリーの完全なる成員であると捉え、またそのように聴者に伝えている。この時話者と聴者の頭の中では、対象物をカテゴリーの中に確実に入れ込むという作業が行われている。カテゴリー化という観点からこの状況を解釈するならば、接頭辞「真（ま）」はカテゴリー化を進めるベクトルの働きを表す。

本稿では、接頭辞「真（ま）」が色彩語彙と共に用いられる表現「真（ま）＋色彩語彙」を検討することにより、カテゴリー化を進めるベクトルの性質を明らかにし、カテゴリー変容の過程を探る。用例を調べるにあたっては、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス KOTONOHA』のデモンストレーション版を多く使用した。

まず第１章では、カテゴリーについての先行研究について、本論に特に関連するものを概観する。次に第２章から「真（ま）＋色彩語彙」の表現について検討に入る。第２章ではこの表現が実際に示す色について検討する。第３章では「真（ま）＋色彩語彙」における「真（ま）」の機能について明らかにする。続く第４章では第２章、第３章で明らかになった事実が、カテゴリー化において働く２通りのベクトルの存在とその性質を示すことを論じ、カテゴリー変容の過程を明らかにしていく。

1. カテゴリーに関する先行研究

カテゴリーを特定の性質を持つものの集合とする古典的なカテゴリー理論は、現在では間違いであるか、あるいは少なくとも不十分な理論とされている。Wittgenstein は「ゲーム」というカテゴリーに含まれる成員全てに共通する性質がないことを指摘し、「家族的類似性」によってこのカテゴリーが成立していると論じた。Berlin & Kay の色彩語彙研究および Rosch のカテゴリー研究は、同一の語彙で示されるもの、つまり同一のカテゴリーに含まれる成員でも、

カテゴリーの成員としての良さに程度差があることを明らかにした。これも、特定の性質を持つか持たないかによってのみカテゴリーが成立するとする古典的な考えには反する事実である。カテゴリーには最良例もあれば、かろうじてカテゴリーに含まれるものもあり、この現象はプロトタイプ効果と呼ばれる。例えば「青」という色彩カテゴリーの中には、青色の絵の具のように誰が見ても常に「青」と認められる色もあれば、かろうじて「青」と呼ばれる色も含まれる。また「鳥」のカテゴリーの中には、雀や鳩のような典型的な鳥も当然含まれる一方、ダチョウやペンギンのような「鳥」と聞いてすぐには思いつかないような生物も含まれる。

このプロトタイプ効果によるカテゴリー理論を、Lakoff は認知モデルの存在を提起することで更に発展させた。Lakoff によれば、認知モデルとは人が知識を組織化するもので、Fillmore のフレーム理論や Langacker のイメージ・スキーマ構造、Lakoff & Johnson のメタファー写像、メトニミー写像などを含み込み、Fauconnier のメンタル・スペースへとつながる性質を持つ。この認知モデルがプロトタイプ効果を生じさせる要因の１つとなることを Lakoff は示した。

認知モデルとの関連でプロトタイプ効果が生じる例として、Lakoff は“mother”について論じている。“mother”というカテゴリーのプロトタイプは、「子供の父親となる男性と結婚をして子供を産み、産んだ後にはその子供に食事を与え身の回りの世話をして育てる女性」ということになるであろう。このプロトタイプは、“mother”というカテゴリーを複数の認知モデルが形成していることによる。“mother”というカテゴリーは遺伝モデル、養育モデル、結婚モデル、家系モデルなど複数の認知モデルにより成立しており、このうち多くの認知モデルに同時に属する成員が、“mother”カテゴリーのプロトタイプとなるのである。

“mother”というカテゴリーに複数の認知モデルが存在することを更に証明するのは、“real mother”（「本当の母親」）という表現が表す複数の意味である。“real mother”（「本当の母親」）は時に「生みの母親」を意味し、また時には「育ての母親」を意味する。これは、“mother”とは何かを決定する基準として、遺伝モデルを選択することもあれば、養育モデルを選択することもあるということである。“real”（「本当の」）という表現は、“mother” カテゴリーを形成する複数の認知モデルの中から、最も重要なものを１つ選択するという機能を果たしている。

Lakoff 自身は、カテゴリーというものが複数の認知モデルから成る可能性を

示すという目的のために "real mother"という表現が表す異なる意味を検証したが、この議論は結果として、カテゴリーの不安定さや流動性をも示す事になっている。語彙を使用する話者や聴者やその場の状況などコンテクストにより、選び取られる認知モデルは変化し、カテゴリーの有り様も変化している。

語彙の意味、カテゴリーの不安定さを心理学の立場から論じたのは Barsalou だ。彼は人が日々会話する中で、目的に応じて新たなカテゴリー "*ad hoc* category" を自由に作っている事を指摘した。(Barsalou, 1983) また、"*ad hoc*" でない既に慣用化されているカテゴリーについては、以下のように、その「概念」"concept"が、人により時により目的に応じて変化する一時的なものであると論じた。(Barsalou, 1993)

> "concept is a temporary construction in working memory, derived from a large body of knowledge in long-term memory to represent a category ....
> Across contexts, a given person's concept for the same category may change, utilizing different knowledge from long-term memory, at least to some extent." (Barsalou, 1993, p. 29)

Barsalou はいったん成立し慣用化されたカテゴリーそのものについては、安定したものと捉えている。カテゴリーは長期記憶に蓄えられた知識から成っていて、人はそこから目的に応じて必要な知識だけを短期記憶に呼び出し、カテゴリーについての「概念」"concept"を思い浮かべる。この「概念」はその時々の語彙の意味となり、安定せず、コンテクストにより柔軟に変化する。例えば、"newspaper"のカテゴリーについての長期記憶に蓄えられた多くの知識は、コンテクストに関わらず安定しているのだが、この語彙が朝の出勤前に用いられれば、「朝に家庭に届けられる物」「記事が載っている物」といった知識の組合わさった"newspaper"の「概念」が現れ、この語彙がキャンプファイヤーなど火をおこさねばならない状況で用いられれば、「紙でできているもの」「燃えるもの」といった知識の組合わさった "newspaper"の「概念」が現れる。

同じ心理学の立場からではあるが、Glucksberg はカテゴリーの更なる柔軟さを示した。Barsalou の場合、慣用化された語彙のカテゴリーについては、「概念」は変化するものの、その出所である長期記憶に蓄えられた知識の集合体としてのカテゴリーは、変化する事のないものとされていた。しかし、Glucksberg によって、カテゴリーはその変化しないとされた枠までもが破られ、新たなカ

テゴリーに変化することが明らかにされた。メタファー表現はこうしたカテゴリーの変化を引き起こす。メタファーに用いられる語彙は、その語彙が本来表していたカテゴリーよりも抽象的でかつ上位のカテゴリーを表すのである。

> ordinary conversational metaphors are used to create new concepts and categories. (Glucksberg 2001)

> metaphor vehicles refer to abstract superordinate categories. (Glucksberg 2003, p. 95)

例えば次の文（１）のメタファーにおいて、“shark”は本来のカテゴリーで持っていた「泳ぐ」「ひれがある」「鋭い歯をしている」といった性質を失い、「冷酷だ」「攻撃的だ」「無慈悲だ」といった性質だけを残した新たなカテゴリーになっている。

(1) My lawyer is a shark. (Glucksberg 2003, p. 93)

言語学語用論の立場からは、Carston が Sperber & Wilson に始まる関連性理論にのっとり、「アドホック概念」という用語を用いて同様の問題を論じている。Barsalou と同様に、語彙化された安定したものとしての「カテゴリー」が存在するとしたうえで、そこから柔軟にコンテクストごとの「アドホックな」「概念」が生じるとする。Barsalou と異なるのは、Barsalou が概念を全て「アドホック」と捉えたのに対し、Carston が語彙化されたカテゴリーに結びついた「アドホックでない」概念も存在すると考えた点と、「アドホック概念」が派生する過程に「関連性」が重要な鍵となるとした点である。カテゴリーがもともと持つ概念と新たに生まれる「アドホック概念」の間では共有される要素があるとしながらも、コンテクストにより関連性に応じて、語用論的に概念が拡張（broadening）したり縮小（narrowing）したりすると論じる。例えば次の文（２）がレストランで客から苦情として発せられた時、“raw”という語彙は「生である」という本来の語彙化されたカテゴリーの概念から拡張して、「話し手が望んでいたほど充分には焼けていない」という新たな概念を表す。

(2) This steak is *raw*. (Carston 2002, p. 328)

MacLaury はカテゴリーの不安定性を、以下に挙げる "vantage theory" によって説明した。この理論は当初、複数言語における色彩カテゴリーの研究から生まれたが、Hill, J.H. & E.M. MacLaury (1995) 等のように、色彩以外のカテゴリーへの適用が進められた。

> Vantage theory is a model of categorization. It includes the categorizer as a "viewer" who actively creates, changes, divides, and dissolves a category, and it details how the viewer accomplishes these processes.
> (MacLaury 2007, p. 140)
>
> Since attention to similarity contracts perceived distance between stimuli, this range will be broad (the speaker will name many colors with this term). ...
> ... attention to distinctiveness, the mobile coordinate, limits the range.
> (Hill & MacLaury, p. 282)

"vantage theory" においては、人が何らかの事物を何れかのカテゴリーに分類しようとする時、人がその対象物をどういった基準地点（＝vantage point of reference）から見るか、また他の事物との類似性（similarity）に注目するのか弁別性（distinctiveness）に注目するのかによって、対象物を組み込むカテゴリーが決定すると論じる。

本稿では、概念もカテゴリーも、固定せずに柔軟に変容すると捉える。カテゴリーが成立する際のみならず、いったん慣用化され確立したカテゴリーも、実際にその語彙が使用される場面で、コンテクストにより柔軟に変容する。同一言語内でも、同一話者でも、この変容は起きる。本稿の以下の章では、日本語の色彩カテゴリーを材料に、日本語の語彙化カテゴリーが、コンテクストによって変容する事実を確認し、またその変容の過程を明らかにしていく。MacLaury の用いた similarity と distictiveness は、ここで重要な要素となる。具体的には、「真（ま）＋色彩語彙」という日本語の表現について分析する。

2. 「真＋色彩語彙」が表す色

先の「序」でも述べたように、日本語の「真」という接頭辞の原則的な機能は、「名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞などの上に付いて、完全である、真実である、すぐれているなどの意を加える。」ということである。こうした接頭辞が色彩語彙の前につくと、その機能はより具体性を持ち、「純粋にそれ

だけで、まじりもののない、全くその状態であるなどの意を添える。」という機能を持つとされる。（『精選版日本国語大辞典第三巻』, p. 686）

以下の例（３）（４）は確かに純粋にそれだけでまじりもののない色そのものを表すと言えるが、（５）ー（１０）で表現される色は異なる。（３）（４）は、絵の具の「白」「赤」「黒」のような、色彩カテゴリーにおいてはプロトタイプと言える色だが、（５）ー（１０）はプロトタイプとは言えない。（５）の文は、二人が雪だるまのように白くならなくても使えるし、（６）の泥の汚れは、純白のはずがない。（７）のように冷えて血が通わなくなった指は、赤味はなくなるだろうが、絵の具の白のような色にはならない。（８）のようにいくら泣いても目は絵の具の赤ほどにはならないし、（９）のようにひどく日焼けしても肌は絵の具の赤や黒の色にはならない。（１０）のように垢で汚れた襟は、真っ白ではなくなるが、やはり絵の具の黒のような色にはならない。

（３）真っ白い雪に真っ赤な血がドクドクと流れだしている。[1, 2]
（４）髪は長くて染めていません。真っ黒なサラサラのストレートで...
（５）降りしきる雪が二人を真っ白にした。
（６）ダンプやトラックなんかは泥とか付きやすくて真っ白になっちゃう...
（７）指先が凄く冷たくなって、第２関節くらいまで真っ白になるんです。
（８）泣きっ放しなのだろう。目は真っ赤だ。
（９）全然焼けません。他の人が真っ赤・真っ黒になっても白いまま...
（１０）ワイシャツの襟は垢で真っ黒に汚れていた。

筆者はまた徳島大学の森岡芳洋教授から、先生が実際に耳にされた興味深い会話文を教えて頂いた。それは次に挙げる（１１）で、この言葉は目前の田に育つ稲の葉が、他の田の稲より濃い色になっているのを見た農家の人から発せられた。農家の人に「真っ黒」と表現された稲の葉は、先生の目には「濃い緑色」にしか見えなかったという。

（１１）チッソ肥料の効きすぎで、葉が真っ黒になっとうなあ。

---

[1]本稿においては、色彩表現を中心に、議論において重要な意味を持つ箇所に、下線を付して示す。
[2] 本稿に挙げる例文は特に説明のない場合は、全て大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス KOTONOHA』のデモンストレーション版からのものである。

また、筆者には家族との会話でも気になる例が耳に残っている。テレビに登場したやや高齢の女性タレントの服を見て、家族が驚きの声をあげた。

（１２）わあー、真っ赤！

その「真っ赤」という描写に筆者は違和感を覚えた。テレビに映るその色は、Berlin & Kay などが分析した日本語の色彩カテゴリー図における「赤」の範囲内に入るかもしれないが、決して絵の具の「赤」のような「赤」、つまり「赤」のカテゴリーの焦点色ではなかった。

接頭辞「真」の意味と機能が「純粋にそれだけで、まじりもののない、全くその状態であるなどの意を添える。」ということならば、「真っ白」「真っ黒」「真っ赤」という表現は、Berlin & Kay が示した焦点色の「白」や「黒」や「赤」を指し示すのが当然と思われるのに、（５）ー（１２）の例はこの予想に反した色を指し示している。焦点色を表すどころか、Berlin & Kay 等 がまとめた色彩カテゴリーの枠に収まらない色まで表している。例えば（９）のように「赤」「黒」「白」と呼ばれる肌の色は、「日本人の肌について語る」というコンテクストから切り離して色だけを判断するならば、「赤」「黒」「白」とは決して呼ばれない色のはずである。色彩語彙のカテゴリーを、Berlin & Kay が分類したように言語ごとに決まった枠で固定しているものとすると、上の（５）ー（１２）の例は説明できない。色彩のカテゴリーが固定せず、変容する性質を持つと考えなければ説明がつかないのである。

（５）ー（１２）のような例は、二つの点について明らかにする必要性を示している。まず一点目には日本語の接頭辞「真（ま）」の意味と機能について、二点目には色彩語彙が表す色彩カテゴリーの柔軟性についてである。どちらの問題点についても従来の説明では不十分であり、あらたな説明が必要となる。

3. 「真（ま）」の意味と機能

日本語の接頭辞「真（ま）」が実際にどういった意味合いで用いられているのか、ここではその意味と機能について検討する。

先に述べたように、『精選版日本国語大辞典第三巻』において日本語の「真（ま）」という接頭辞は、基本的な意味機能としては「名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞などの上に付いて、完全である、真実である、すぐれているなどの意を加える。」と定義づけられている。この辞典では、この基本的な意味機能に続いて、「純粋にそれだけで、まじりもののない、全くその状態である

などの意を添える。」という第二の意味機能が並べられている。(p. 686) 色彩語彙の前に用いられる用法はこの第二の意味機能の例として記載されている。先の第２章であげた例のうち（３）（４）はこの第二の意味機能があてはまる。

しかし、これも第２章で論じたように、派生した第二の意味機能では説明できない「真（ま）＋色彩語彙」の例（５）ー（１２）などが存在する。これらの例において表される色は、「純粋にそれだけで、まじりもののない、全くの」「白」「赤」「黒」ではない。

（５）ー（１２）における「真（ま）」は、この語彙の基本的定義の内、「真実である」という意味についてはあてはまる。コーパスには次の（１３）のような例も見られる。「真実である」にほぼ等しい「本当」という表現が用いられている。

（１３）「いや、おはずかしい」　高橋医師は<u>本当に赤く</u>なって頭をかいた。

ただし、「真実である」や「本当」という表現も、その意味機能は一つだけではない。「本当に赤い」も「真っ赤だ」と同様に、Berlin & Kay の色彩カテゴリーの焦点色を指示する場合もあれば、決して焦点色とは言えない色を指示する場合もある。（１３）で表される色も、「赤」の焦点色ではない可能性が高い。結局、（５）ー（１２）における「真（ま）」と（１３）の「本当」は、ほぼ等しい意味機能を持って用いられていると考えられ、この意味機能を明確にするという課題は残されたままとなる。

「真（ま）」と共起しても「本当」と共起しても、色彩語彙は焦点色を表さない場合がある。この場合の「真」とは「本当」とはどういうことなのか。その答えはカテゴリー構造に着目する事ではじめて得られる。「真」も「本当」もこれと共起する語彙のカテゴリーに、描写する対象物が成員として属することを強く主張していると解釈できる。「序」でも述べたカテゴリーにおける「真（ま）」の機能を、以下に改めて繰り返し記すが、この機能を「真（ま）」は担っていると考えられる。

「真（ま）」という接頭辞を使用する話者は、自分の目にした物が接頭辞「真（ま）」の後に続く語彙の示すカテゴリーの完全なる成員であると捉え、またそのように聴者に伝えている。この時話者と聴者の頭の中では、対象物をカテゴリーの中に確実に入れ込む作業が行われている。カテゴリー化という観点からこの状況を解釈するならば、「真（ま）」という接頭

辞はカテゴリー化を進めるベクトルの働きを表す。

上に示した「真（ま）」の機能は、「真（ま）＋色彩語彙」が Berlin & Kay 等の色彩カテゴリーに収まらない色を指し示す（５）ー（１２）のような例の存在と、一見矛盾するように見えるかもしれない。しかしこの事実は、色彩カテゴリーが、Berlin & Kay がまとめたような色彩カテゴリーから広がっていると考えれば、説明がつく。Berlin & Kay や MacLaury の研究はマンセルの色彩チップを被験者に見せて使用する色彩語彙を調査するなどの手法を中心としたもので、日常会話など実際の言語使用において色彩語彙がどのように用いられるかといったコンテクストの要素は反映されていない。（５）ー（１２）の「真（ま）＋色彩語彙」の表現の使用は、コンテクストによってカテゴリーの変容が起きること、つまりコンテクストによって人の捉え方が変化することで、新たなカテゴリー化が起きることを示しているのである。

4. カテゴリーの変容：カテゴリーを形成する２種のベクトル

Berlin & Kay の色彩カテゴリーは、各言語の使用者が色だけに注目し、色彩チップとなった多くの色を比較する中で判断した結果をまとめている。これはある意味、色だけを見るという特殊なコンテクストで生じるカテゴリー分類と言う事もできるが、基本的には各言語において語彙化されたカテゴリー分類と言ってよいだろう。

先にあげた例（３）（４）の「真っ白い雪」「真っ赤な血」「真っ黒な髪」といった表現において表される色は、「雪」や「血」や「髪」などの物から切り離してその色だけを見せられたとしても、混じりけのない「白」「赤」「黒」として判断される。この場合、接頭辞「真（ま）」は、日本語において「白」「赤」「黒」と語彙化されたカテゴリー（lexicalized category）の焦点色つまりはプロトタイプを指し示している。

これに対して（５）ー（１２）の「泥で真っ白」「泣いて目が真っ赤」「肌が真っ赤・真っ黒に焼ける」「ワイシャツの襟が垢で真っ黒」などの例は、泥汚れや肌や洗濯物といった物から切り離してその色だけを見せられたとしたら、「白」「赤」「黒」とは判断されない可能性が高い。つまり色を帯びるとして描写される要素がコンテクストに存在することではじめて、その色は「白」「赤」「黒」と判断されている。コンテクストの存在が語彙化されたカテゴリーの枠を破り、新しいカテゴリーを生み出している。ここで接頭辞「真（ま）」は、（３）（４）の場合とは異なり、プロトタイプを指し示してはいない。

（５）ー（１２）を観察して気づくのは、そこに「対比」が共通して見られる点である。どの例も通常の状態あるいは変化が起きる前の状態で見られる色に比較すると、「白」「赤」「黒」の方向へ大きく離れた色となっている。（５）で雪に降られる以前の二人は髪や衣服の色がはっきり見えていただろうが、いまや白い雪がそれを随分と隠してしまっている。（６）でも泥がつく前のダンプやトラックは車体の色がはっきりしていただろうに、いまや泥が付着しそれが乾いて車体の色が台無しになっている。（７）（８）（９）では普段の肌の色や目の色が、血の気がなくなったり（７）、充血したり（８）、日焼けする（９）ことによって、「白」「赤」「黒」の方向へと変化している。（１０）では汚れていなかった清潔なワイシャツが、いまや垢ですっかり汚れてしまっている。それは絵の具の「黒」のような色ではないが、清潔な「白」ではない不潔な「黒」の方向へと離れてしまっている。ここには清潔な「白」と不潔な「黒」との「対比」がある。洗濯という行為は不潔な物を清潔にするという目的を伴うので、この「対比」が明確になりやすいと考えられる。（１１）では他の田の稲の色との「対比」、（１２）では一般に多くの高齢の女性が身につける衣服の色との「対比」がある。

（５）ー（１２）に見られる対比は、色彩カテゴリーに新しい「境界線」（*ad hoc* boundary）を形成している。対象物とその色を「知覚」した人間は、対象物の色が以前の色とは「違う」(distinctive)と「認識」し、そこに明確な「境界線」を引く。その「境界線」を新たな基準にして、対象物の色が何の色に「近い」(similar) か判断する。対象物の色は、この「近い」と判断された色カテゴリーに組み込まれる。組み込まれたカテゴリーは、結果として、語彙化されたカテゴリーよりも広い大きなカテゴリー (*ad hoc* category) へと変容する。

（３）ー（１２）のカテゴリーの状況と変容は次の図１のようにまとめられる。まずカテゴリーが変容する前の、語彙化されたカテゴリー（lexicalized category）の段階での認識構造は、知覚される色 X1 とこれをカテゴリー化するベクトル vector1 を中心に説明される。（３）（４）のように、「真（ま）＋色彩語彙」が語彙化されたカテゴリーのプロトタイプの色を指し示す場合がこれにあたる。実際に知覚される色 X1 は、語彙化されたカテゴリー(lexicalized category）のプロトタイプ（☆）に似ていると認識される。この強い「類似性」(similarity)の認識は vector1 を生じさせ、語彙レベルでは接頭辞「真（ま）」として現れる。X1 は vector1 によって、語彙化されたカテゴリー（lexicalized category）のプロトタイプにほぼ一致するとして位置づけられる。

次にカテゴリーが変容し新しいカテゴリーが生まれる過程は、知覚される色

X2とこれをカテゴリー化するベクトルvector2を中心に説明される。（５）ー（１２）のように、「真（ま）＋色彩語彙」と表現されながらプロトタイプの色を表さない場合がこれにあたる。実際に知覚される色X2は、話者がそれまでに築いた何らかの基準とは「異なる」と認識される。この「対比」(distinctiveness)の認識は「境界線」（*ad hoc* boundary）を生む。新たに生じた「境界線」（*ad hoc* boundary）に立ってX2の色を判断すると、これまでには組み込まれていなかったカテゴリーのプロトタイプ(prototype)への「類似性」(similarity)が認識される。強い「対比」(distinctiveness) の認識が「類似性」(similarity) の認識によって方向性を得てベクトル(vector2)となり、語彙レベルでは接頭辞「真（ま）」として現れる。こうして新たなカテゴリー(*ad hoc* category)が誕生する。

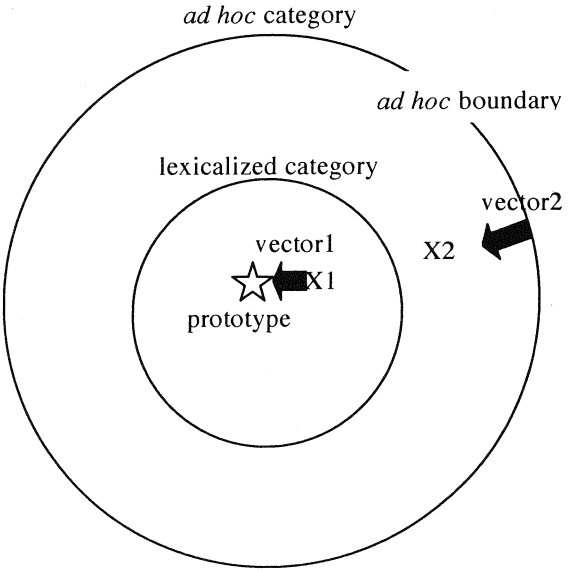

図１　カテゴリー変容の過程（１）

「対比」とは二者の対立である。よって、「対比」により新しいカテゴリーが誕生する際には、同時にもう一つの新しいカテゴリーが誕生している。もっとも、そのもう一つの新しいカテゴリーは明確な語彙となって現れるとは限らない。（１１）の稲の葉に対して「真っ黒」と表現した例もこれにあたる。（１

1）では「真っ黒」という表現が、新しいアドホックな「黒」のカテゴリーの出現を示しているが、この時同時に「緑」のカテゴリーが、語彙化されたカテゴリーよりも狭いアドホックなカテゴリーへと変容している。「黒」と「緑」の二つの色彩カテゴリー間で境界線が移動して、新しいアドホックな「黒」と「緑」のカテゴリーが生まれているのである。

稲の葉を「真っ黒」と表現した話者にとって、稲の葉の色は日々の生活の中で、ある一定の範囲に収まるものとして理解されていたと想像される。それは語彙化されてはいないが、田や農作業というコンテクストにおいては一つのカテゴリーとして無意識に確立していたであろう。このカテゴリーの存在ゆえに、今目の前にこのカテゴリーに属さない色の稲の葉が現れると、話者は知覚した色がこのカテゴリーと「対比」するカテゴリーに属すると認識する。新たな対比するカテゴリーを求めた時に、話者はその色の「類似性」を「黒」という語彙カテゴリーに見いだす。「対比」と「類似性」の発見は話者に強く認識されて、語彙レベルで接頭辞「真（ま）」として現れる。「類似性」の認識により、語彙化されたカテゴリー「黒」は広がり、この稲の葉の色までをも含む新しいアドホックな「黒」カテゴリーが誕生している。

この知覚から認識、そして語彙レベルへと連動する過程を次の図（2）で示す。話者が日常生活で確立していた稲の葉の色を *ad hoc* category GREEN とし、対象物の色 X がこのカテゴリーから排除されるとする境界線を *ad hoc* boundary とする。話者のこの境界線を境とする「対比」に対する強い認識がカテゴリー変容を引き起こすベクトルとなり、それは語彙化されたカテゴリー「黒」への「類似性」を意識する事で方向性を得る。これが図の中では vector2 で示される。このベクトルの力により、対象物の色は語彙化された「黒」のカテゴリーを広げて中に入り込む。結果、新しい「黒」のカテゴリー*ad hoc* category BLACK が出現する。稲の葉という対象物の色は、語彙化されたカテゴリーのレベルだけで判断すれば「緑」となるが、会話という言語使用の場面においては、コンテクストによって生まれるアドホックなカテゴリー「黒」の成員と判断されるのである。

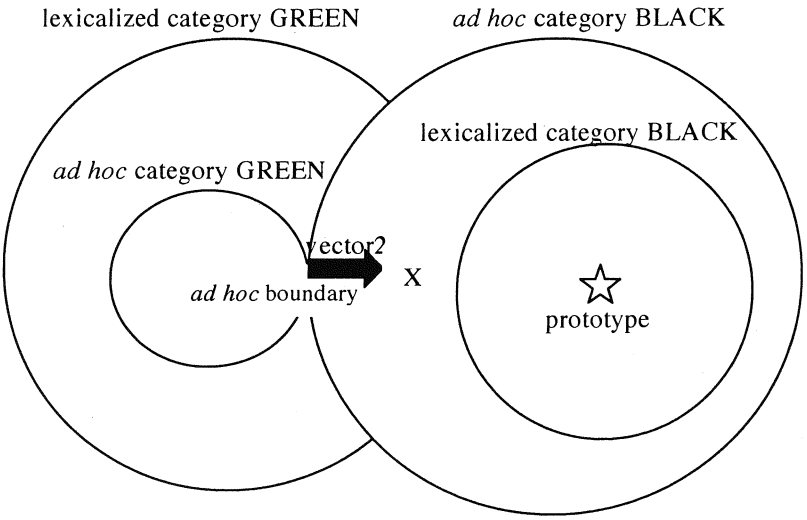

図2　カテゴリー変容の過程（2）

結語

日本語の「真（ま）＋色彩語彙」という表現が、言語使用の場において、実際にどのような色彩に対して用いられているかを検討する事により、カテゴリー変容の過程が明らかになった。

接頭辞「真（ま）」は、カテゴリーのプロトタイプへの方向を指し示すベクトルの言語化したものとまとめられるが、厳密には二種類に細分化される。一つは既に一言語内で語彙化されたカテゴリーのプロトタイプそのものを指し示すものであり、もう一つは新たなカテゴリーの境界線の出現による対比関係を主張するものである。対比関係を主張するベクトルは、類似性を見いだしたカテゴリーのプロトタイプの方向を向いてはいるが、プロトタイプに届きはしない。第一のベクトルは語彙化されたカテゴリーを変化させるものではない。一方第二のベクトルは語彙化されたカテゴリーを利用しながらも、新たなカテゴリーを生み出す力となる。

人間の知覚と認識と語彙体系と言語使用という複数の異なるレベルでの情報は互いに影響し合う。これによりカテゴリーは成立し変容する。色彩という最も知覚レベルの情報に対応すると考えられる語彙についても、知覚の情報だけでなく、人間の認識構造や既に確立している語彙体系や、実際の言語使用の場面でのコンテクストの情報が全て関与している。

人間は認識構造と語彙体系を身につけながらも、実世界での知覚や会話から得る情報を、常に認識構造と語彙体系と照らし合わせ、柔軟に適応させていると考えられる。その結果、認識構造も語彙体系も、その場に応じて変化する。Kay & Kempton, Kay & Regier や山田(2009)が示したように、知覚や認識もこの情報の影響から自由ではなく、語彙体系に反映される慣習化した認識構造からの影響を受ける。

人間の知覚と認識と語彙体系と言語使用という複数の異なるレベルでの情報が、互いに影響し合うわけだが、その影響のしかたについては、カテゴリーの問題も含め多くの問題に関連して、更に研究が進められ明らかにされる必要があるだろう。

参考文献

Barsalou, L.W. 1983. Ad hoc categories, *Memory and Cognition 11*, pp. 211-227.

_____. 1993. Flexibility, structure, and linguistic vagary in concepts: manifestations of a compositional system of perceptual symbols, in Collins, A.F. et al. (eds.) *Theories of Memory*, pp. 29-101. Lawrence Erlbaum Associates.

Berlin, B. & P. Kay 1969. *Basic Color Terms –Their Universality and Evolution-*. University of California Press.

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Blackwell. (内田 聖二　他訳『思考と発話』研究社 2008)

Fauconnier, G. 1985. *Mental Spaces*. MIT Press.

Fillmore, C. 1982. Frame semantics, In Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in Morning Calm*, pp. 111-138. Hanshin.

Glucksberg, S. 2001. *Understanding Figurative Language: From Metaphor to Idioms*. Oxford Psychology Series 36. Oxford University Press.

_____. 2003. The psycholinguistics of metaphor, *Trends in Cognitive Sciences 7*, pp.92-96.

Hill, J.H. & R.E. MacLaury 1995. The terror of Montezuma: Aztec history, theory, and the category of "person". In J.R. Taylor & R.E. MacLaury (eds.) *Language and the Cognitive Construal of the World*, pp. 277-

329. Mouton de Gruyter.

Kay, P. & W. Kempton 1983. What is the Sapir-Whorf hypothesis? *The Berkeley Cognitive Science Report Series*.

Kay, P. & Regier 2006. Language, thought, and color: recent developments, *Trends in Cognitive Sciences 10*, pp.51-54.

Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things –What Categories Reveal about the Mind–*. The University of Chicago Press.（池上 嘉彦他訳『認知意味論』紀伊國屋書店 1993）

Lakoff, G. & M. Johnson 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.

Langacker, R. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1. Stanford University Press.

MacLaury, R.E. 1995. Vantage theory, In Taylor, J.R. and R.E. MacLaury, (eds.) *Language and the Cognitive Construal of the World*, pp. 231-276. Mouton de Gruyter & Co.

_____. 1997. Skewing and darkening: dynamics of the cool category, In C.L. Hardin, & L. Maffi (eds.) *Color Categories in Thought and Language*, pp. 261-282. Cambridge University Press.

_____. 2007. Categories of desaturated-complex color: Sensorial, perceptual, and cognitive models, In R.E. MacLaury, et al. (eds.) *Anthropology of Color: Interdisciplinary Multilevel Modeling*, pp. 125-150. John Benjamins Publishing Company.

Rosch, E. 1975. Cognitive reference points, *Cognitive Psychology 7*, pp. 532-547.

_____. 1981. Prototype classification and logical classification: the two systems, In E. Scholnick, (ed.) *New Trends in Cognitive Representation: Challenges to Piaget's Theory*. pp. 73-86. Lawrence Erlbaum Associates.

Sperber, D. & D. Wilson 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.

山田仁子 2009.「カテゴリー分類が引き起こす認識の変化-英語の色彩 yellow の場合-」『徳島大学総合科学部言語文化研究』 Vol.19 pp. 75-82

小学館国語辞典編集部編 2006 年 『精選版日本国語大辞典 第三巻』 小学館

国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス KOTONOHA』 デモンストレーション版